2015 年度事業報告書

2016 年 6 月

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ

＜2015 年度の活動＞

平成 27 年度は、前年度までの「福祉施設製品等調査研究事業（浜松市）の成果である「障害福祉を軸に据えながら文化事業を行っていく」という方向性が明確になったことを受けて、どのような可能性があるのか、様々な実験を行った年といえる。つまり、レッツの強みとして整理されたのが「利用者とスタッフが混然一体となり、常に何かを生み出し続けている現場」、「革新的な価値は利用者とスタッフの日常にある」、「肯定し受容する強さとしての『寛容さ』」であったことから、現場発信の事業を展開したのである。

活動の基盤となる障害福祉施設アルス・ノヴァでは、これまでの生活介護、自立訓練、就労移行、放課後等デイサービスに加え、27 年度からは就労継続支援 B 型をスタートさせた。文化センター「のヴぁ公民館」の運営管理と、インクルーシブメディア「のヴぁてれび」の制作を軽度の障害のある方が担うという革新的な試みである。公民館にメンバーが常駐することで、公民館をより多くの時間開くことができるようになり、公民館の運営は安定してきた。また、「のヴぁてれび」というメディアを獲得したことで、アルス・ノヴァという現場の魅力を対外的に発信できるようになったことは大きな成果である。

こうした福祉施設としての基盤を強化することと平行して、前述のレッツの強みを活かしてソーシャルインクルージョンを推進する活動が複数展開された。そのひとつが静岡県の地域人づくり事業の委託などを受けて行った「ひとインれじでんす」である。これは有識者の方々に、アルス・ノヴァや公民館の現場に身を置いていただき、この場の在り様からソーシャルインクルージョンに向けてどのような可能性があるかをスタッフと共に考える場を設けたもので、大きな示唆があった。このように外部の方々を施設に招く事業は、前年度から試みていた研修事業の礎ともなるもので、一般の見学者に対しても、実験的にアンケートやヒアリングを行って検討を重ねた結果、年度末には「観光」というキーワードが導き出されてきた。日常の中に身を置いて、訪れた人自身が光を見出すという「観光」のあり方は、28 年度の中心的なテーマになりそうだ。

いっぽうで、27 年度の代表・久保田へのトークイベントの登壇依頼や講師の依頼、寄稿依頼は例年になく多く、こうした現場の在り様に、福祉という枠組みを超えて関心が集まってきているようすが伺える。その背景として、厚生労働省が 26 年度から障害者の芸術活動支援を開始したことや、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムとして、障害者との新たなプログラムの模索が行われていることが考えられる。なかでもアーツカウンシル東京はアルス・ノヴァやのヴぁ公民館に滞在したり、スタッフとミーティングをするなど、2020年東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムのリーディング事業「TURN」に向けてレッツと連携することが多かった。また、TURN の 27 年度の総括イベント「TURN フェス」には「たけし文化センター」としてレッツが参加することになり、アルス・ノヴァの展示をするとともに、アルス・ノヴァのメンバーとスタッフの総勢35名で「TURN フェス」に参加することが実現した。

他にも、京都府の展覧会では利用者の尾形さんの展示が行われたり、高橋舞さんがガムテープを貼ったものが東京・千代田区の展覧会で「作品」として取り上げられたり、また、アサヒ・アート・フェスティバルでは、重度の知的障害者3名が東京を歩くという企画を行ったりと、28 年度には利用者が外に出かける機会が多く作られた。

福祉の現場から離れた公民館を活用した事業としては、対話の場「かたりのヴぁ」や、市内で創造的な活動を行っている団体を招いたトークイベント「Platform of Diversity」を行ったが、これは参加者が多様な考え方や事業に触れる機会となり、28 年度も継続する予定である。このように公民館は一般の人々が自由に活動できるプラットフォームとして機能したが、しかし、公民館に来ない限りは広がっていかないジレンマがある。その点、27 年度に就労継続支援 B 型として始動した「のヴぁてれび」は、多様な人々が自由に出入りでき、しかもネットを通して全世界に広げていくことのできるメディアとして大きな可能性を持っている。28 年度も引き続きこのメディアを活用した事業を展開したい。

＜障害者福祉支援法に基づく障害福祉サービス事業＞

■利用状況

【生活介護（定員 10 名）／自立訓練（定員 6 名）／就労移行支援（定員 6 名）／就労継続支援 B 型（定員 10 名）日中一時支援】

今年度は新たに「就労継続支援 B 型」を開始した。これまで、精神障害の方や軽度の知的障害の方が利用するサービスとして自立訓練、就労移行支援の2種を行ってきたが、どちらも2年間の利用期限が設けられており、期限を超えてしまう方が増えてきたためである。また、能力があり働く気持ちもありながら一般企業での就職が難しい方も、この就労継続支援 B 型を利用することで、新たに「のヴぁてれび」の制作クルーとしての仕事を始めることができるようになった。

登録者は生活介護 15 名、自立訓練 2 名、就労移行支援 6 名、就労継続支援 B 型 5 名、日中一時支援 10 名から始まり、年度終わりには、生活介護 16 名、自立訓練 5 名、就労移行支援 5 名、就労継続支援 B 型 6 名、日中一時支援 12 名と、特に精神障害を抱える自立訓練利用者が増加している。一日平均利用数は、生活介護 8 名、自立訓練 0.6 名、就労移行支援 3 名、就労継続支援 B 型 3 名。生活介護については日によっては定員を上回る日も出てくるようになっている。サービス全体の年間延べ利用者数は 4819 名と、前年度より 861 名増加した。

■事業運営の状況

27 年度はサービスの報酬改定が行われ、有資格者がいる施設では加算がつくことになったが、アルス・ノヴァでは有資格者が少なく、加算を受けることができなかった。また、就労移行事業所に必要な人員を確保したままで就労継続支援 B 型を開始したことで、26 年度までに受けてきた人員配置加算が減少することとなった。就労移行支援は、アルス・ノヴァの支援の特長から、必ずしも就労を望まない方々の受け入れ先となっていたが、2年の利用期限が設けられており、期限を迎える利用者が利用できなくなっていた。27 年度に就労継続支援 B 型を開始したことで、軽度の障害のある方（特に精神系）の受け皿ができたことにより、市との協議の上、就労移行支援事業は 28 年 7 月から廃止することとした。

■主な活動

①対外活動

27 年度は利用者との外出が多かった。東京の展覧会「芸術のならず者」にガムテープ作品が取り上げられた高橋舞さん、京都の展覧会「幅と奥行き」にその行動が展示された尾形和記さんが展示会場をスタッフと共に訪れた。また、アサヒ・アート・フェスティバルの事業として3名の生活介護利用者を、また、遠州横須賀ちっちゃな文化展には久保田壮さんとともに外出。詩作を行うムラキングこと村木大峰さんは、新宿のコミュニティスペース akta や久保田の登壇するシンポジウムや講座等に出演した。

3月には、東京都美術館で行われた「TURN フェス」に、利用者のうち、希望者17名が参加し、1泊2日の旅行となった。こうした外出の試みを行うことによって、ふだんの利用日にはなかなか垣間見ることのできない利用者の新たな側面を見ることができたという声がスタッフから多く上がった。

公民館では、昨年度に引き続き「モーニングコーヒー大ちゃん」や「ムラキングの妄想と空想カフェ」などが定期的に開催され、現在も継続している。また、季刊誌「コトノネ」では、村木大峰さんが読者からの質問に答える連載「ぼくでいいなら、きかしてよ」が1年間連載された。

こうした対外活動を通して、スタッフには様々な問いが生まれた。「その人自身から離れ、独り歩きする『作品』に意味はあるのか」、「（東京の）洗練された無視があった。それはいいことなのか？」「美術館ではただ居るだけであっても『観る／観られる』関係が生まれること」等、多くの示唆があり、多くの議論が生まれた。

②表現

昨年度に引き続き、アルス・ノヴァ2階では毎日のように音楽セッションが行われている。ミュージシャンのマッスル NTT が継続的にシフトに入るようになったため、音楽活動もさらに活発になっている。マッスル NTT が持ち込んだ「てまえみそのうた」が利用者に大人気となり、林里実さんが歌ったりピアノでひいたり、堤亮賀さんが喜んで跳ぶなど親しまれている。また、おおよそ隔月で行われている「不思議の国とアルス」はスタッフ佐藤主導で開催され、ドラマーの梶原徹也さんを交えて児童・大人ともに好きな楽器を手に大セッションを繰り広げている。また、月1回の「小さな音のワークショップ」（講師・松岡江利子さん）や、「レッツアート」（講師・高木淑子さん）、月2回の「銅版画講座」（講師・山下淳子さん）等の講座やワークショップを開き、希望者が参加することで多様な表現の場の提供に努めている。

また、こうした活動を他の事業所に向けて、アルス・ノヴァの仕事として行う試みも行われた。北区の細江あすなろ作業所さんが、表現活動の一環としてアルス・ノヴァを招いてアルス・ノヴァの面々と即興音楽を楽しんだ。日ごろ観ることのできない顔を見ることができたという感想もいただいたり、今後も何らかの形で活動を共にすることが約束された。

年度末には、静岡銀行を通した市川園の助成事業により、50万円分の楽器を購入。2台目のドラムのほか、銅鑼やスチールドラムなど、これまでになかった音質の楽器を取り入れ、より多様な音楽活動を行えることとなった。

③のヴぁてれび

新たに開始した就労継続支援 B 型では、ワーク（番組制作をする）・エクササイズ（居場所利用）・バラエティ（タレント活動）の3通りの働き方を設定した。そのうち、ワークのメンバーは「のヴぁてれびクルー」と呼ばれ、法人本体からの受託というかたちで番組制作や配信の仕事を行うこととなった。春から技術習得の訓練を始め、試験的に6月から「週刊のヴぁてれび」の配信を開始。9 月から本格的な番組配信を行った。その後、浜松市主催イベントでのライブ中継や、レッツの主催事業「Platform of Diversity（計6回）」のライブ配信を手掛けた。ただ、作業を担う「クルー」の利用（就業）が不安定であり、作業を安定するためにはメンバーを増やすことが課題となった。

④精神障害の利用者の増加

27 年度は統合失調症などの精神障害のある利用者が増加した。居場所となるのヴぁ公民館の事業が相談支援事業所に知られるようになったこと、また、キーマンとなる利用者から口コミで利用が広がったことが理由だと考えられる。また、これまでにサービスを利用してこなかった精神障害のある方が、のヴぁ公民館を居場所として利用するようになり、でアルス・ノヴァを利用することになったというケースもあった。精神障害の方の場合は、お互いおしゃべりをすることや、決まった日課があるほうが良いということから、次年度にはアルス・ノヴァにはこれまでなかった日課をつくって試してみることになった。また、働く意欲のある利用者には、図書館での実習を行った。

⑤地域とのかかわり

近所の方から時折シールの寄付をいただいたり、オルガンの寄付をいただいた。秋の入野福祉祭りでは、紙吹雪で遊べる場所や、ムラキングの詩のワークショップ、高橋舞さんの紹介パネルなどを展示し、多くの人たちでにぎわった。そのいっぽうで、散歩先やコンビニエンスストア等でのトラブルにより警察が呼ばれて事情聴取を受けるという出来事もあった。

⑥畑

昨年借りていた畑が、スーパーマーケットの建設に伴い利用ができなくなり、夏を迎える前に畑作業をすることができなくなった。ひ

きつづき、借りることのできる畑を探している。

⑦健康

運動不足解消や成人病予防のため、佐鳴湖ウォーキングが始まったが、やがてブームが去っている。時々散歩に出かけるようにしている。また、浜松市の歯科検診の往診を依頼し、主に生活介護利用者に対して指導を受けた。

①散歩

②畑で野菜を収穫

③入野福祉まつりでは紙やぶり大会が人気に

④小さな音のワークショップ

⑤細江あすなろ作業所さんとの音楽ワークショップ

⑥東京へロードムービー制作の旅

＜児童福祉法に基づく障害児通所支援事業＞

■利用状況

【放課後等デイサービス（定員 10 名）】

登録者は 25 名（日中一時支援 11 名）からスタートし、年度末には 27 名（日中一時 11 名）と 2 名増加。平均利用人数は 8 名、年間のべ利用者数は2428 人と、昨年度より709 名減少。昨年度から依然として浜松市内の放課後等デイサービス事業所は増加しており、利用者の数は減少している。多くは特別支援学校の中学部・高等部の生徒で、小学部の児童の割合は少ない。全体の傾向として、浜松の放課後等デイサービス事業者の増加に伴い、利用者は減少傾向にある。他施設では運営時間、送迎サービス等を手厚く行う所が多くなっているが、アルス・ノヴァでは引き続き行動障害を伴う重い障害の子ども、自閉傾向の強い子ども等、特長のある子どもの受け入れの充実を図っていきたい。

■事業運営の状況

27 年度の報酬改定により、有資格者や経験年数による加算が増えたが、アルス・ノヴァでは、長年勤めた職員が退職するなど、新たに加算を受けられる人員体制を敷くことができなかった。また、児童発達支援管理責任者の職員の退職が続いたため、以後資格要件の都合上、3 月までに児童発達支援管理責任者が2度交代した。管理責任者の不在を避けるため、2名が管理責任者研修を受講、次年度以降も要件が整った職員には受講を促す方針である。

■主な活動

①遊び

職員の退職に伴って、表現活動のできるスタッフを補充した。そのため、日中遊びにダイナミックさが生まれ、特長のある子どもたちののびのびとした表現が多くみられた。絵を描くことを好む児童が多かったため、お絵かきの活動は常に行われていた。部屋いっぱいに広げた大きな紙や、支援室の壁や床にも、いっぱいに落書きが広がり、さらに壁紙をその上に貼ってさらに描いた。また、絵の具で描いた絵を壁に貼り付けて乾かした行為を発端に、展覧会のように描いた絵を壁に飾る行為も見られた。男性スタッフの間では戦いごっこの好きな児童のために大型の武器づくりが流行し、女性職員とは折り紙も流行した。また、室内に布で張られたハンモックは、遊びに応じてそのかたちをアスレチックのように変化させ、児童に大変人気を博した。

②外出

西伊場公園や図書館、潮見坂、うなぎパイファクトリー、自衛隊エアーパークなどへドライブに行き気分転換を図った。これまで行ったことのなかった、遊びやすい新しい公園を発見し、外出支援を充実させた。

③音楽ワークショップ

ドラマーの梶原徹也さんを招いた音楽ワークショップ「不思議の国とアルス」がある日には児童の多くも参加した。静岡銀行を通した市川園の助成事業により、50万円分の楽器を購入することができ、本格的な楽器を思う存分演奏する環境が整った。

③家族との関わり

2012 年に行っていた「もくあさ」を復活させ、7 月から 10 月の毎月1回、アルス・ノヴァに子供を通わせる親を中心におはなし会を開催した。テーマとして「きょうだいが迷い、悩みはじめる」、「きょうだいから聞くきょうだいの話」、「どうしたらいいの？みんなどうしてるの？お母さんから聞く思春期のはなし」、「私の人生、こどもの人生～お母さんから聞く自分の生き方の話～」。アルス・ノヴァで初め

て、兄弟同士の対話の場を設けることができたこと、そして、兄弟がその後大学の友人らを連れて再訪するなど、良い結果が生まれた。

①子どもたちに人気のハンモック

②夏休みには毎日水遊びを楽しんだ

③公園への外出

⑤「もくあさ」チラシ

④お絵かき

＜文化センター事業＞

■のヴぁ公民館事業

①概況

毎週水曜日から日曜日に開館した。平日はイベントの有無にかかわらず、アルス・ノヴァ利用者のうち精神障害のある利用者がおだやかに過ごす場として機能した。就労継続支援 B 型のクルーが番組制作の傍ら場を開き、スタッフも1名が常駐。毎日平均5名程度が居場所として利用したほか、年間約 600 名弱の方がイベントや講座に参加するなど、少しずつ来館者を増やしている。

建物は 27 年 3 月のアート NPO フォーラム開催以来、2棟の建物を一体化して利用しているが、食べ物を作るようなキッチンや流し台がなかったため、10 月にはキッチンスペースが内設された。また、ガラスサッシをガレージ入口に取り付ける工事を行い、環境整備に取り組んだ。スタッフ、利用者が自ら講座を開催するなど、2年目を迎え活動が充実してきた。

②主な活動

昨年度に引き続き、スペースの開放、自主企画の開催、持ち込み企画の受け入れ、講座の開催、部活動の推進等を行った。

(1)スペースの開放

月・火曜日を除く 10 時から 16 時にスペースを解放した。週末は来館者が比較的多く、昼食をつくる方も来て食事をシェアするようすが見られた。他の就労系障害福祉事業所に通う方や、引きこもりがちな近所の方が遊びに来るなど、アルス・ノヴァでは出会えない層の方々が新たに訪れた。なかには、週末の居場所を求めて来られた精神障害の方を福祉サービスへ繋げる役割を果たした例もあった。

(2)自主企画の開催

かたりのヴぁ、Platform of Diversity を開催した。詳細は「インクルージョン事業」に後述する。

(3)持ち込み企画の受け入れ

来館者が主催する講座やイベントに場所を提供した。今年度は「村木さんのダジャレ講座」「ビビビと響け詩の言葉」、「ふみこさんのアロマ講座」、「グリーンスムージー講座」等が定期的に開催された。そのほか、「出張円盤」「主要都道府県文化行政主幹課長級会議」「昆虫食倶楽部」に場所を提供した。また、2 月には福島県飯舘村の「いいたてまでいの会」が主催する「いいたてミュージアム」が公民館にて展覧会を開催した。展覧会に先立ち、正規スタッフ全員で福島県飯舘村の視察ツアーに参加し、被災状況を視察した。

(4)講座の開催

・専門家を招いた講座

レッツアート(講師・高木淑子・月1回)、アートインコミュニティ3(講師・ホシノマサハル・月1回)、淳子さんの銅版画教室(講師・山下淳子・月2回)を主催。レッツアートは季節ごとに分けて受講者を募集し、毎回一般参加者が5名程度となっている。年度後半には、アルス・ノヴァの利用者を積極的にレッツアートに招くようになり、一般受講者と共に絵画制作を楽しんだ。アートインコミュニティ3は、生熊涼太さんとホシノさんとの制作となることが昨年度は多かったが、今年度は新規参加者も2名加わった。銅版画教室については、アルス・ノヴァの利用者の親や、大人の利用者が主に参加し、思い思いに版画を制作した。

・アルス・ノヴァの利用者による講座や催し

アルス・ノヴァの利用者を招き、各々の特性を生かしたイベントを主催した。今年度は作詩を行う村木大峰さんの「ムラキングと詩をつ

くる時間」(月2回程度)「ムラキングの妄想と空想の時間」(月1回程度)、比類ない佇まいを持つ D さんの「モーニングコーヒーだいちゃん」(週2回程度)が開催された。

(5)部活動の推進

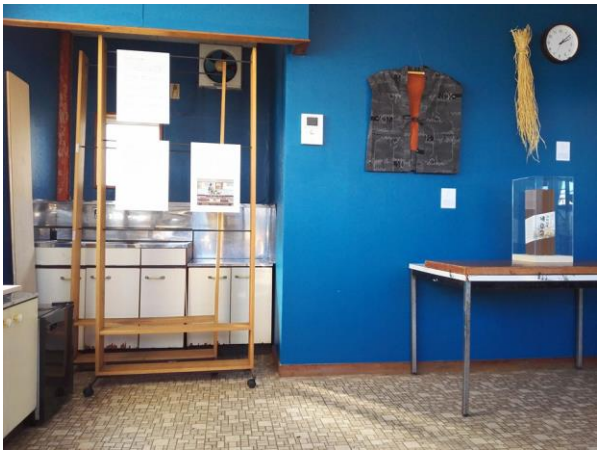
来館者やスタッフが発起人となった部活動としては、「げーむ部(月1回程度)」、「rec(カセット録音文化研究会)(月1回程度)」、「音戯(おとぎ)の部屋(月1回程度)」、「積読本どくしょ会(月2回程度)」、「落語を聞いてみる(不定期)」、「映画研究会(不定期)」、「大人の夜遊びコソコソ研究会(不定期)」、「エロスのヴぁ(不定期)」、「わたし語り(不定期)」、「さとうくんの時間(不定期)」等が活動が行われた。

③総括

立ち上げた昨年度と違って、27 年度は講座やイベント運営が安定してきた。大きな変化としては、就労継続支援 B 型のメニューであるのヴぁてれびの拠点として、てれびクルーが常駐して公民館の管理運営を行ったことで、常に場を開くことができたことがある。館者数こそ多くはないが、新しく訪れるようになった方も数名おり、イベントにも参加されるようになった。彼らはもし場が賑わっていたら利用しづらいかもしれない。そうした意味では、来館者数の数は問題ではなく、彼ら一人一人にとっての文化センターとしての役割を果たしていると言える。貸館としての利用も昨年度より多くなっているが、公民館としてはこうした利用も増やしていきたい。

①持ち込み企画「人生ガンプラ」

①レッツアート



③いいたてミュージアム

④部活「音戯の部屋」

■インクルージョン事業

①概要

26 年 3 月に開催したアート NPO フォーラムを受けて、ソーシャルインクルージョンを一層推進していくための事業として、静岡県や浜松市、アサヒ・アート・フェスティバル・福武財団から助成・補助を受け、主に以下の事業を行った。

・ひとインれじでんす
・のヴぁてれび
・かたりのヴぁ
・Platform of Diversity
・TURN フェスへの参加
・人材育成

②ひとインれじでんす

福祉、アート、出版、文化政策、地域振興など、様々な分野で活躍している学識経験者、実践者をお招きして、障害福祉施設アルス・ノヴァおよびのヴぁ公民館に滞在し、ソーシャルインクルージョンについて考えるプログラムを計9回開催した。毎回、滞在の最後に各ゲストの専門分野とアルス・ノヴァ／のヴぁ公民館の現場のあり方を引き付けてお話いただき、その後スタッフとゲストで議論の場を設け、多くの示唆があった。

第1回 6 月 2 日 陸奥賢（コモンズデザイナー）
第2回 6 月 20 日 長津結一郎（ソーシャルインクルージョン研究者）
第3回 7 月 10 日 関根幹司（スタジオクーカ施設長）
第 4 回 9 月 19 日 アサダワタル（日常編集家）
第 5 回 10 月 9 日 吉本光宏（ニッセイ研究所主任研究員）
第 6 回 11 月 14 日 金代健次郎（財団法人福武財団事務局長）
第 7 回 12 月 18 日 加藤種男（企業メセナ協議会常任理事）
第 8 回 1 月 16 日 都築響一（編集家）
第 9 回 2 月 19 日 椹木野衣（美術評論家）

③のヴぁてれび

アルス・ノヴァの比較的軽度の知的障害や精神障害のある方の就労の機会（就労継続支援 B 型）として、インクルーシブメディア「のヴぁてれび」を開設した。利用者は3ヵ月の研修期間を経て、9 月より放映を開始。利用者自身がディレクターとなり、自分の興味関心に基づく番組制作を行い、撮影、編集も彼ら自身で行う映像制作、ならびにスタジオ運営を行う。毎週ネット上にアップロードされる「週刊のヴぁてれび（のちに「週刊アルス・ノヴァ」に名称変更）」のほか、レッツのシンポジウムやトークイベントの音響、撮影、配信を行う。また外部からのイベント運営や司会進行、タレント派遣も行う。アルス・ノヴァの情報発信が主な仕事であるが、のヴぁてれびはインクルーシブ・メディアを掲げており、スポンサーにたよらず、これまでメディアが発信してこなかった事や人、発信したい人が発信するメディアとして、障害だけでなく、地域や、市民活動など個人の思いに寄り添う形でのメディアを目指している。

27 年度は、「週刊アルス・ノヴァ」の YouTube 配信、「Platform of Diversity」のライブ中継、「スマイルフェスタ」のライブ中継等を主に行った。

④かたりのヴぁ

26 年度に西川勝さんをお迎えして始まった哲学カフェ「かたりのヴぁ」は 27 年度にはスタッフや参加者が進行役となって毎月1回のペースで継続。8 月には新たな試みとして、子育て中の親を対象とした「親のヴぁ」を昼の部として始めたが、諸事情により、年末には親のヴぁから「かたりのヴぁ昼の部」として夜と同じテーマで開催するようになった。いっぽう、常連の参加者が磐田でも哲学カフェを開くようになったり、地元経済団体のメンバーが初めて参加し、団体自身でも哲学カフェのイベントを開くなど、徐々に哲学カフェの場が広がるという流れが生まれたことは、大きな成果である。

6 月 20 日　第 12 回 「かたりのヴぁの希望と可能性」

8 月 29 日　第 13 回　親のヴぁ「『心配』のゆくえ」 かたりのヴぁ「答えを出すということ」

9 月 18 日　第 14 回 「会話≒対話～お話してますか？～」

10 月 5 日　第 15 回　親のヴぁ「『未知』とあゆむ」 かたりのヴぁ 「お弁当のなかみ」

11 月 21 日　第 16 回　親のヴぁ「こころの育てかた」 かたりのヴぁ「じりつ」

12 月 15 日　第 17 回　親のヴぁ「ライフプラン」 かたりのヴぁ「シアワセって・・・」

1 月 30 日　第 18 回　親のヴぁ「手を動かして考える『シアワセ』の相関図」 かたりのヴぁ「『みんなで幸せ』ってどうやるの？」

⑤Platform of Diversity

27 年度浜松市みんなのはままつ創造プロジェクト採択事業として、他の採択団体を数グループずつ招き、事業のプレゼンテーションや創造都市に関する議論を行うイベントを計6回行った。最終回には日常編集家のアサダワタル氏、音楽家の片岡祐介氏、音楽学者の奥中康人氏を招き、創造都市におけるプラットフォームとは何かというテーマで議論の場を設けた。

11 月 27 日　Vol.1 アートとデザイン」

12 月 2 日　 Vol.2　まちと生活」

12 月 19 日　Vol.3　子どもと教育

1月 8 日　　Vol.4　産業とテクノロジー

1 月 23 日　 Vol.5　文化と自然

2 月 10 日　 座談会「創造都市におけるプラットフォームとは何か？」

⑥TURN フェスへの参加

アーツカウンシル東京が 2020 年東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムのリーディング・プロジェクト「TURN」の 27 年度のまとめとして 3 月に開催した「TURN フェス」において、レッツはアーティストの中﨑透氏の協力のもと、「たけし文化センター@東京都美術館」を出展した。同時に、静岡県から受託したオリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査の一環として、障害のある人たちのアートフェスへの参加を実験した。利用者・スタッフ総勢35名の1泊2日の行程で、初めて長距離をバスで移動することや、宿泊、そして美術館という場所で滞在することを通して、利用者とともに外泊することの課題を再確認するとともに、美術館という場所での「観る／観られる」関係に考えさせられることも多かった。

⑦人材育成

静岡県「文化・芸術による障害のある人の社会包摂を推進するための人材育成業務」の委託を受け、2 名のスタッフを雇用し、アルス・ノヴァにて障害のある人に触れながら、公民館の運営や上記インクルージョン事業の現場に従事させ、ソーシャルインクルージョンを進める人材を育成した。この2名は 28 年度以降も継続して雇用することとなった。

⑧冊子制作

インクルージョン事業で行った内容をスタッフによる考察やゲストからの寄稿を交えてを4冊の冊子にまとめた。

・冊子　4冊各 2000 部（①人　②創造都市　③表現　④対話）

・4冊セット用カバー　1500 部

・ポスターサイズ年表　2000 部

①ひとインれじでんすのゲストがのヴぁてれびを制作クルーと鑑賞

②ひとインれじでんすのようす（中央がゲスト）

③かたりのヴぁ

④Platform of Diversity

⑤TURN フェス会場風景

■研修開発事業

25,26 年度の福祉施設製品等調査研究事業において、当法人の強みを洗い出した際、障害のある人のタレント性だけでなく、スタッフや空間も含めたアルス・ノヴァ／のヴぁ公民館全体のありようこそが強みであるという考え方が生まれた。その考え方から、27 年度は、見学の希望があった際には、できるだけ長く滞在していただくよう伝え、ゲストハウスへの宿泊を勧めた。27 年度の来訪者は 40 名弱で、研修開発のため、それぞれにアンケートやヒアリングを行うことができた。27 年度は代表・久保田が各所で登壇することが多かったため、視察者が多かったのは喜ばしいことであったが、例年になく多くの来訪者を対応することになったため、支援に支障をきたすことがあった。

このような反省点をふまえ、3 月には観光家の陸奥賢さんをお迎えし、現場を通常通り運営しながら、いかに外部の方にこの現場で過ごして考えていただくことができるかを議論した。その結果、次年度から「レッツ、観光はじめ☑」と題し、研修ではなく「観光」というキーワードを利用したプロジェクトを進めることが決定した。

研修として高校の教諭が施設を体験